風土記の丘

岩清水遺跡試掘調査報告書

—弥生時代末葉の遺構—

1979

昭和54年

山梨県教育委員会

序

風土記の丘・曽根丘陵公園建設予定地とその周辺には、国指定史跡甲斐銚子塚古墳を始め、大丸山古墳や東山南遺跡・東山北遺跡など先史時代からの多くの遺跡があって、郷土の歴史を知るうえで、貴重な文化遺産が遺されている。

この調査は、風土記の丘、曽根丘陵公園の資料館・駐車場等を建設する予定地を埋立てる場所に遺跡があるかどうかを確認するために行った試掘調査であります。

その結果は次に掲げるとおりであります。この調査結果に基づき、計画を実施したいと考えております。

この発掘調査は中道町役場・教育委員会や、発掘参加者など多くの方々のご協力を得て行いました。記して謝意を表する次第であります。

昭和54年10月1日

山梨県教育委員会

教育長　神宮寺　誠

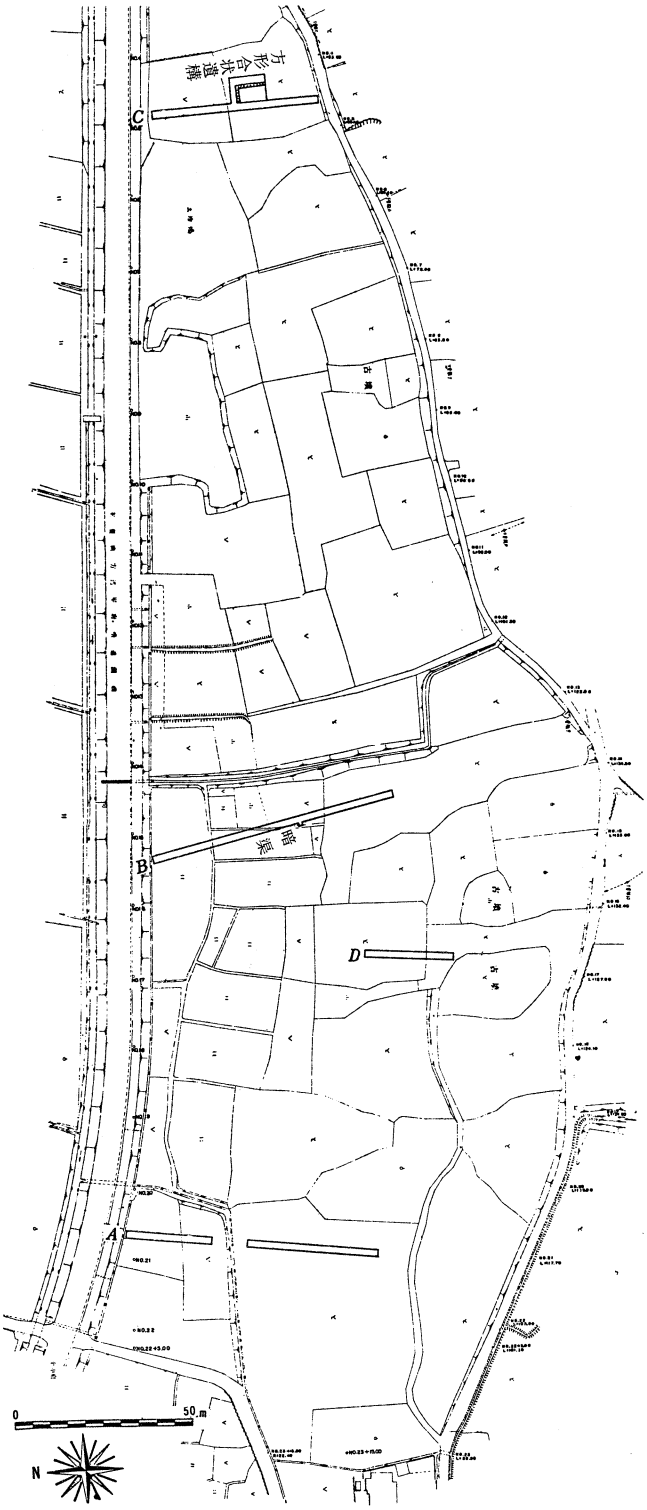
目　次

第 1 節　位置と環境 …… 1
第 2 節　古墳と土器の分布 …… 7
第 3 節　方形台状遺構等と出土遺物 …… 9
第 4 節　結　び …… 18

例　言

1．本発掘は、周知の遺跡ではなかったが、風土記の丘・曽根丘陵公園建設の目的に鑑み、遺構の有無を確認するために行った試掘調査である。このため発見された遺構はその一部を検出するにとどめた。
2．発掘担当及び編集、写真撮影、執筆は県文化財主事森和敏が行った。
3．遺物実測は国学院大学生進藤裕仁、安部伸一、鈴木恭一、薬袋正（遺物復元も）が、トレスは小林たつ子、進藤裕仁が行った。
4．発掘参加者は次のとおりである
　折井忠義（調査員）、渡辺礼一（調査員）、信藤裕仁、小林たつ子（甲府市）、日原喜昭（三富村）、薬袋正（中道町）、後藤久（中道町）、松野薫（中道町）、風間興業職員

第1図　岩清水遺跡位置図

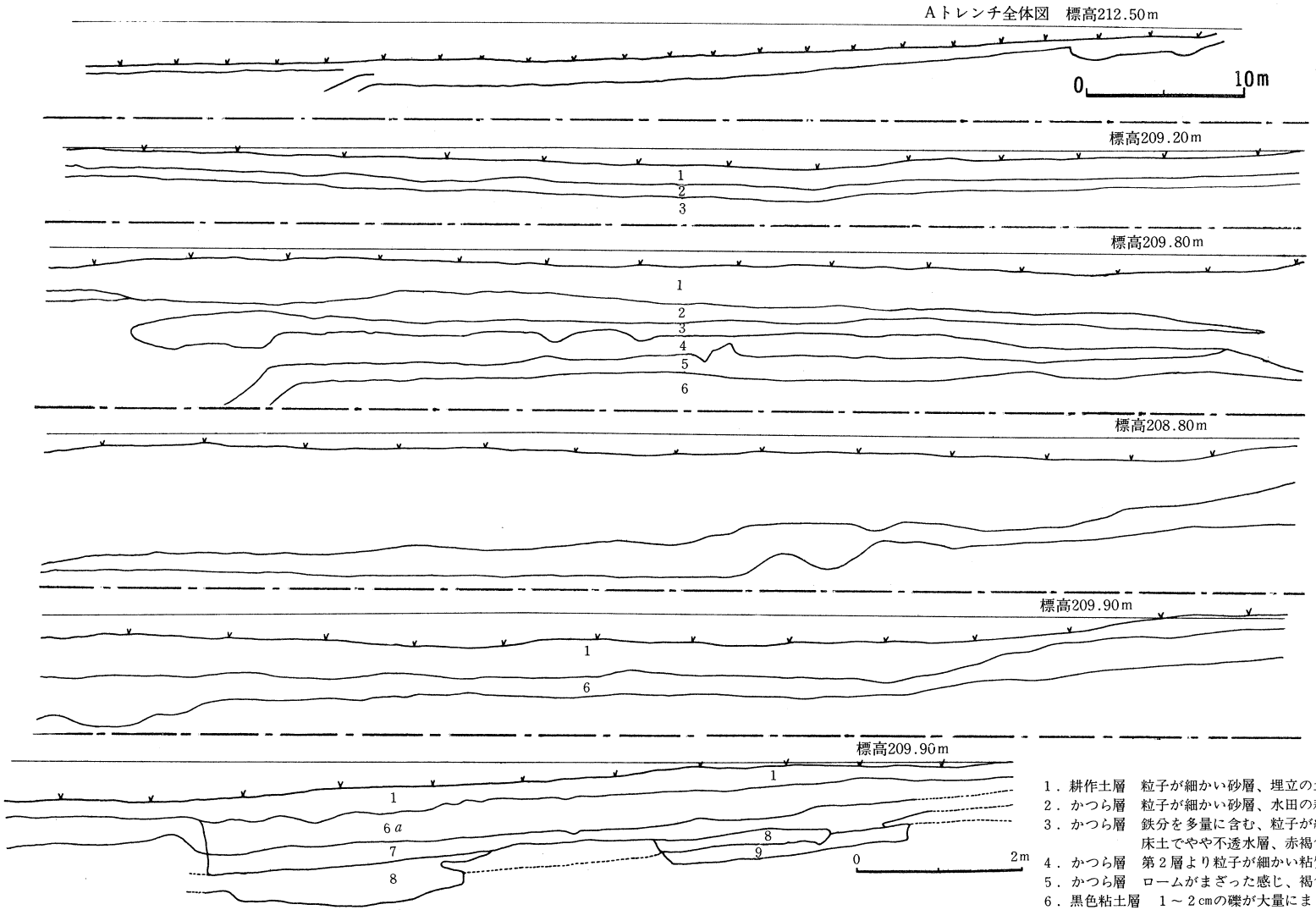


第2図　トレンチ設定・遺構分布図

岩清水遺跡は東八代郡中道町下曽根小字岩清水に所在する。試掘を行った4本のトレンチは20・22番地（Aトレンチ）、5・43・48番地（Bトレンチ）、15・69番地（Cトレンチ）、62・63番地（Dトレンチ）にそれぞれ設定した。

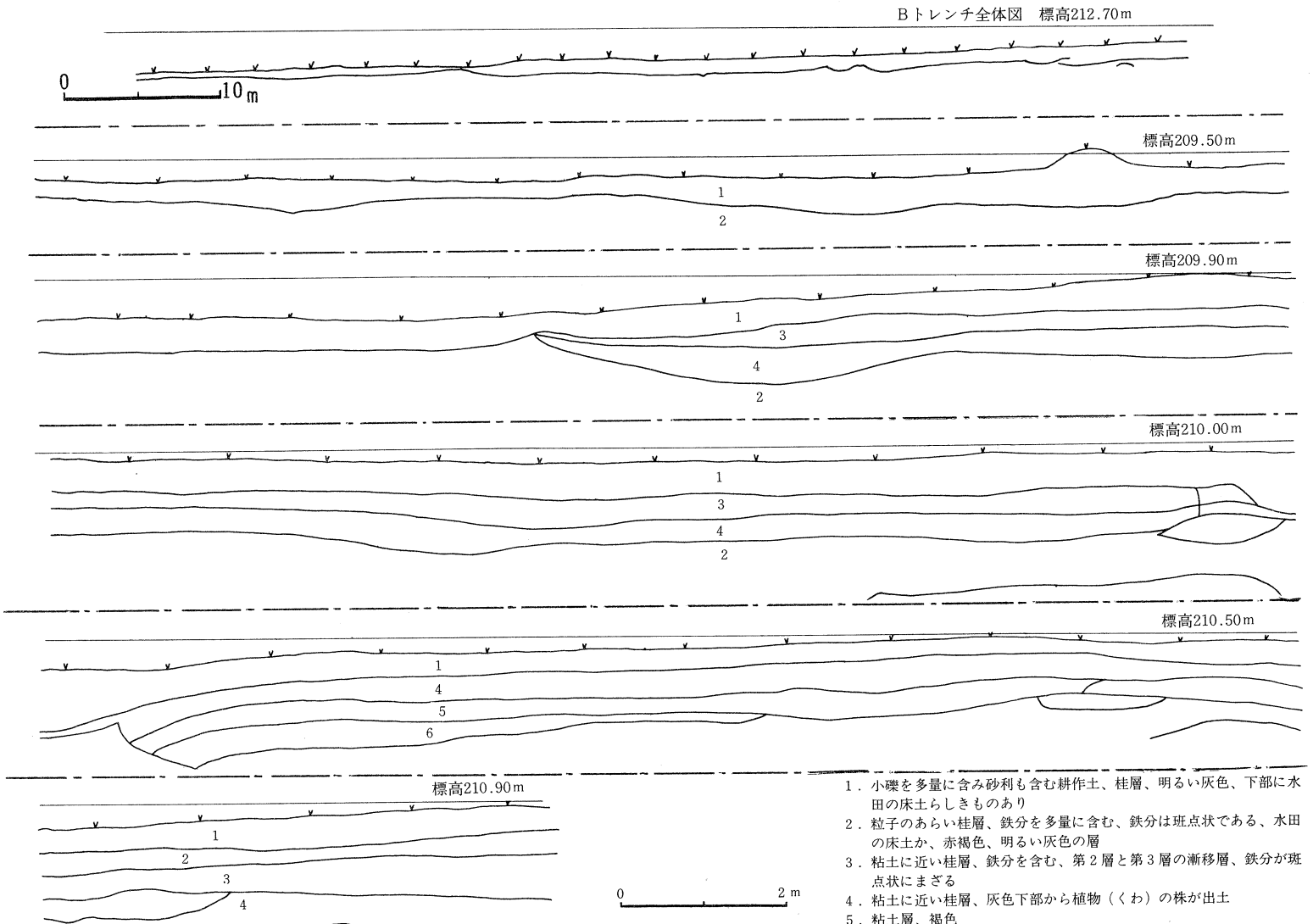
岩清水遺跡は甲府盆地の東を御坂山脈に沿って流れる笛吹川の左岸にあって、曽根丘陵が盆地に向って急峻に落ち込んだところに広い北に緩傾斜したテラス状地形の上にある。ここは低地より比高1mから2m高いだけで、前方は平らな甲府盆地が開けている。試掘したトレンチによって地層を分析してみると、かなりの地形の変化がみられる。トレンチは西（笛吹川）方からA、B、Cと名付け、Dは別の地区に設けた。いずれのトレンチも北になだらかに傾斜している。

Aトレンチは、北側は表土とその下の層も砂層（通称は桂という）である。第3層は比較的粒子の大きさが揃った細かい砂層でさらさらしている。北から16m付近で、粘土層やロームが混入した細かい砂層が、表土との間に嵌入して地層が大きく変化する。山



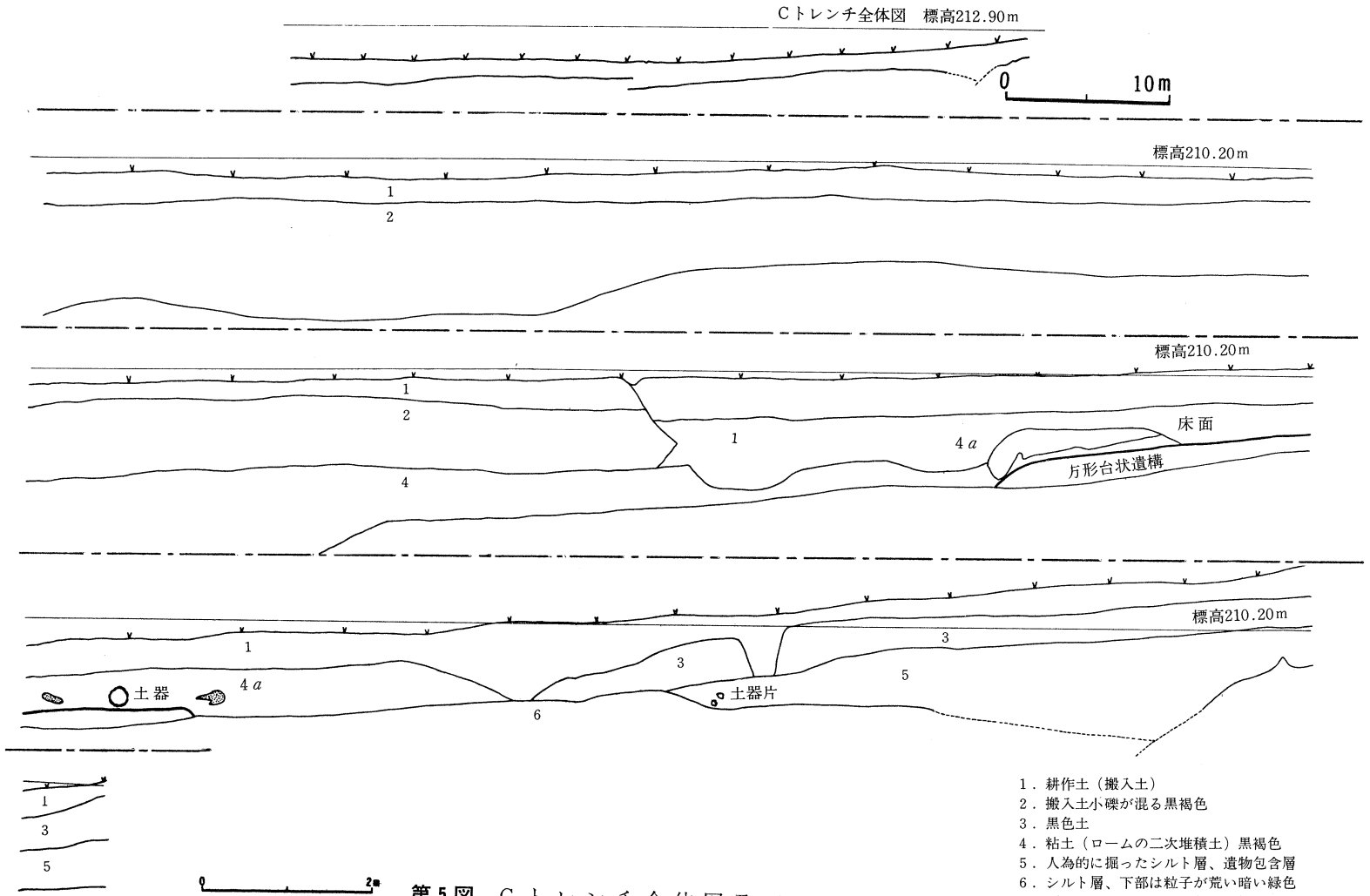
1．耕作土層　粒子が細かい砂層、埋立の土、茶褐色
2．かつら層　粒子が細かい砂層、水田の耕作層、灰褐色
3．かつら層　鉄分を多量に含む、粒子が細かい砂層
　床土でやや不透水層、赤褐色
4．かつら層　第２層より粒子が細かい粘質土、青灰色
5．かつら層　ロームがまざった感じ、褐色、水田耕作層
6．黒色粘土層　１～２cmの礫が大量にまじる、不透水層
7．小礫が多量に混る黒色土
8．小礫と桂が混る黒色土

第３図　Ａトレンチ全体図及びセクション図



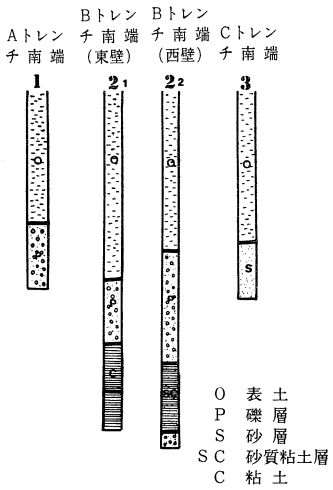
1．小礫を多量に含み砂利も含む耕作土、桂層、明るい灰色、下部に水田の床土らしきものあり
2．粒子のあらい桂層、鉄分を多量に含む、鉄分は斑点状である、水田の床土か、赤褐色、明るい灰色の層
3．粘土に近い桂層、鉄分を含む、第2層と第3層の漸移層、鉄分が斑点状にまざる
4．粘土に近い桂層、灰色下部から植物（くわ）の株が出土
5．粘土層、褐色
（1．2．3層はノッブイ、シルト層、細かい砂を含む）

第4図　Bトレンチ全体図及びセクション図



1．耕作土（搬入土）
2．搬入土小礫が混る黒褐色
3．黒色土
4．粘土（ロームの二次堆積土）黒褐色
5．人為的に掘ったシルト層、遺物包含層
6．シルト層、下部は粒子が荒い暗い緑色
7．グリーンタフと礫の風化土、緑色

第5図　Cトレンチ全体図及びセクション図



第6図 トレンチ地層柱状図
（浜野一彦教授による）

地から続く地形が急に落ち込んでいるわけである。北から48m付近で表土下の地層が全て変化し礫層が厚く入る。ここで再び地層が大きな切れ目となる。最も曽根丘陵に近い場所では最下層が粘土化した青緑の層でグリーンタフが混入している。この最下層はトレンチ南端で急に落ち込んでいる。

Bトレンチは基本的にはAトレンチの地層に似ている。北から46mまで砂層（柱）が細かく2～3層に細分される。最下層はAトレンチと同様比較的粒子の大きさが揃っている細かい砂層である。北より46m付近で大きな変化があり、山地から続く層が急に落ち込んでいる。最南端にはAトレンチと同じ地層が現われている。このトレンチの第4層と第5層から桑の株が多量に出土した。また北より40m付近に暗渠排水施設（通称冷抜とか水道という）が第3層から発見された。

Cトレンチは北から21m付近まで、A、Bトレンチと同様砂層である。やはり山地の地層が急に盆地に向って落ち込んでいる。第3層以上は粘土とシルト層で、最南端にはAトレンチと同じ暗い緑色層がある。北から26m付近より約32mまでの間に第6層の上に方形台状遺構が検出された。

以上のようにテラス状台地から甲府盆地底部に向ってかなり急に落ち込んでいた。また、この落ち込んでいる地域の砂層によって判断すると、静かな入江状の地形になっていたことが考えられると言う（県企画調整局、和田・山本技師）。なお地質については、別に山梨大学浜野一彦教授が報告するとおりである。

Dトレンチは、茶塚と杯塚の北側で、その中間に設定した。このトレンチは、表土が20cmあり、その下は粘土混りの礫層となり、杯塚古墳・茶塚古墳の周濠やその他の遺構はなかった。

以上のようであるが、試掘によって判明した地形から考慮すると、集落のような生活の場としての遺跡があると考えるよりも、特殊な遺構があると考えられるのである。

第 2 節　古墳と土器の分布

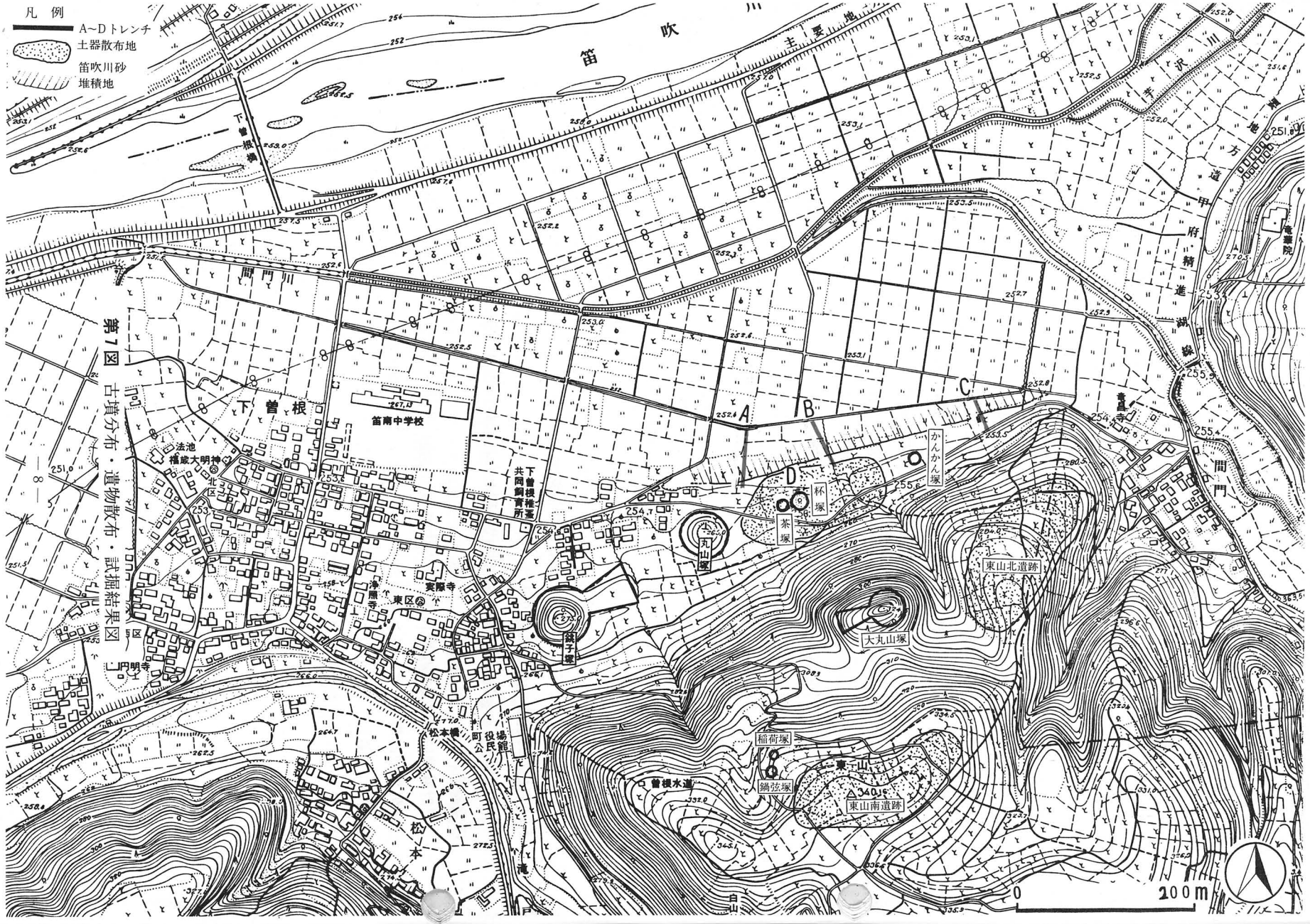
風土記の丘の周辺は弥生時代後記から、古墳時代初頭において、甲府盆地の中心的存在であった。前方後円（方）墳では本県で最も古いと言われる米倉山にある前方後方墳があり、次に大丸山古墳と一世代後くらいの差で築造されたといわれる甲斐銚子塚古墳（昭和49年、三木文雄）があり、更に昭和51年に県教委によって発掘された堅穴式石室を有する茶塚古墳があったり、時期は不明だが、堅穴式石室の丸山塚古墳、杯塚古墳やかんかん塚古墳が約100ｍの間隔で点在している。本県前方後円墳では銚子塚が最大であり、これに次ぐ大きさの天神山古墳が南側の丘陵にあり、更に八代町銚子塚が７㎞北に離れた準曽根丘陵上にある。

遺跡は昭和52年度に県教育委員会が行った分布調査によれば、岩清水遺跡の南にある丘陵の先端部に、弥生時代後期から古墳時代前期頃の遺跡である東山南遺跡、東山北遺跡があり、この丘陵の北にある丘陵の先端部に弥生時代後期から古墳時代初頭の朝日遺跡がある。更に北の境川村には昭和49年県教育委員会が発掘した五領期の京原遺跡があったり、南には米倉山遺跡や豊富村にも数ケ所の遺跡がある。

今回試掘したトレンチの近くでは、Ｂトレンチの南で、杯塚古墳、茶塚古墳を囲むように、東西200ｍ、南北100ｍくらいの範囲で薄く弥生式土器の後期から古墳時代土師器初頭及び平安時代国分期と思われる土器片が散布していた。Ｃトレンチでは弥生時代終末の完形土器や破片が出土したのであるが、地表面にはほとんど土器が散布していないので、遺構が存在する範囲などについてはわからない。ただ地形上で判断すればＣトレンチ南半分からＢトレンチ近くにかけて丘陵の麓までの間にありそうである。

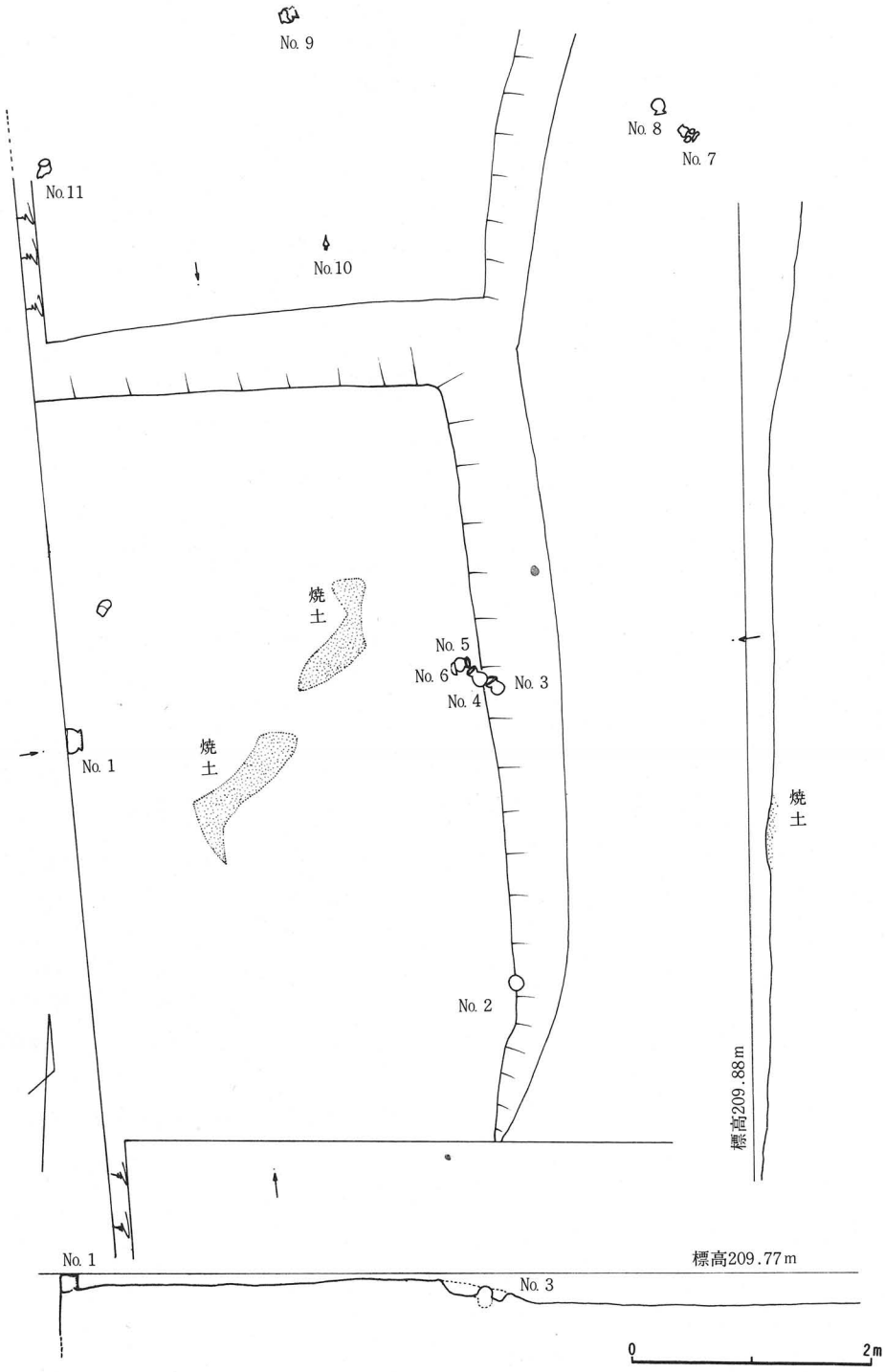
以上のように、この付近には弥生時代後期から古墳時代初頭の遺跡がかなり濃厚に所在するのである。

甲府盆地における弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての遺跡や古墳は、中道町・豊富村三珠町付近に集中している。静岡方面から富士川又は富士山西麓を入った弥生文化は、この曽根丘陵に定着し、成熟しながら、甲府盆地の底部や、北側に発展していったものと思われる。今回発掘された時期の遺跡が基礎となって、順次大規模な甲斐銚子塚を築造する文化へと連結したものと考えられる。



第7図　古墳分布・遺物散布・試掘結果図

第 3 節　　方形台状遺構等と出土遺物



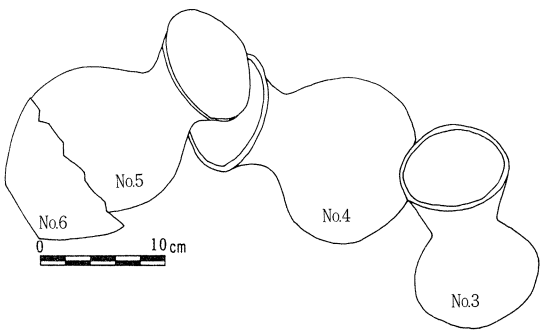
第 8 図　方形台状遺構（Cトレンチ）

方形台状遺構と出土遺物　遺構はＣトレンチの中間よりやや南寄りにあり、トレンチの北端（甲府精進湖線）まで26ｍの距離である。バックホーンで掘ったトレンチで、一部が壊され、また完掘しなかったので、全体の様子はわからなかった。セクションで見ると台状の部分は南北の長さ６ｍ、高さ約20cmである。その北側と南側に更に平坦面が造られている。中央とやや東寄りに薄い焼土があっただけで掘り込んだ溝のようなものはなかった。セクション及び平面から観察すると、削り取って台状にしたもののようである。

遺物は台状遺構の上、その縁辺や周囲に完形の壺４ケ、ほぼ完形の甕や甕等の破片や、石鏃が１ケ出土し、またトレンチからすり鉢状石器１ケが発見された。この遺構の形状や出土遺物から推測すると、中国・畿内地方を中心に発見されている古墳の初現的型体であると考えられている方形台状墓の可能性もあるが、立地等を考慮すると確定出来ない要素もある。

なお台状遺構の上に何かの遺構があった可能性が遺物の出土状況から推測出来るが、農耕による破壊により、検出出来なかった。

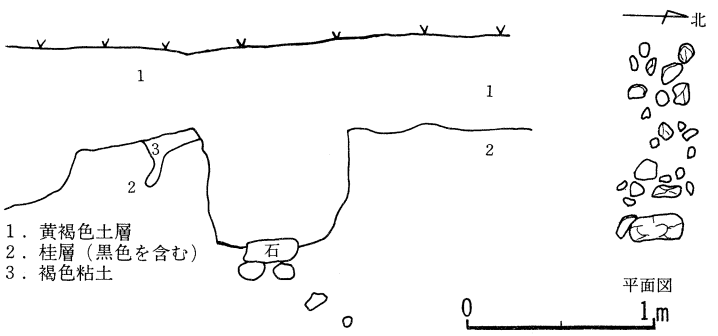
遺物は、土器と石器とがある。土器は壺型、甕型と杯型に分けられる。壺は完形品が３ケあり（第11図No.３・４・５）、台状遺構の縁に乱雑に埋めた状態であり、その中１ケNo.５は壊れた底部に入れ越しになっていた（第９図・図版３）。その１ケだけは折り返し口縁である。No.８は遺構の外に倒れていて、口縁の一部が欠損しており、胴部に焼成後の穿孔がある。以上４ケの壺はいずれも容量はほとんど同じで、ハケ目痕がわずかに斜めについている。No.８だけは口縁に横にハケ目がある。器形は全て胴部の中央に最大径があり、張りの下方にわずかに稜がみられる。甕は１ケが台状遺構の北に延長しているテラス状の平坦な所に倒れていて、胴半分が欠損している。第15図は中道町で出土した参考品である。器形胎土ともこれらの壺に酷似している。No.９は胴部上方と口縁に櫛目の波状文があり、頸部に横の条線をつけている。第11図No.１は上半部だけで胴部、頸部と口縁部にわずかにハケ目痕があり、口唇部周囲に刻目をつけている。口唇部に刻目をつけているものが全部で４ケある。第13図No.８は折り返し口縁の上に帯状突起をつけ、内側に疑似縄文をつけている。No.９も帯状突起をつけている。第13図No.５は樽型土器の口縁である。



第９図　No.３・４・５・６土器出土状況

石器はテラス状の所に石鏃が１ケ発見された。よく研磨されている精巧品である。またバックホーンでトレンチを掘っている際第14図のすり鉢状石器が出土した。これは長径43cm、高さ23cm、深さ９cmと大きい。内面は研磨されていて、Ｖ字状を開いたような傾斜面を持ち、底は特に平になっておらず、凸型である。

暗渠配水遺構（通称冷抜または水道という）　Bトレンチの中間よりやや北寄りにある。トレンチの北端（甲府精進湖線）まで40ｍの地点である。表土から約1.2ｍ掘り込まれていて、一部の石は完全に第二層の中に入っている。構造は拳よりやや大きい石を断面が三角形になるように連続して置き、その上に人頭大の石を並べ、更にその上に小石の層を造っている。これは地下水が高い耕地に暗渠をつくる展型的な方法である。時期はこのトレンチ北半分の第２層から出土した桑の株を^{14}Cによる年代測定を行ったので、それによることとする。



第10図　暗渠セクション・平面図

桑の株　前述したBトレンチの北から40ｍから43ｍの間の第２層から遺物箱２ケ分くらい出土した。笛吹川方面から供給された砂層の下に入っており、地表から深さ1.5ｍ～2.0ｍの間にあった。水を含んだ層にあったため遺体は良好に保存されていた。これを学習院大学年代測定室の木越邦彦教授が^{14}Cによって測定した結果は次のとおりである。これは従って前述した暗渠配水施設の構築年代と第２層の堆積年代が西暦1530年± 100年以後であることを決定するものである。株は現代のものに比較すると小さく貧弱で、条も細い。条のあるものは鋭利な切れ物で切っているものもある。

学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書

1979，　7月２日

1979年１月26日受領致しました試料についての ^{14}C年代測定の結果を下記の通り御報告致します。

なお年代値の算出には^{14}Cの半減期として Libbyの半減期5570年を使用しています。また付記した誤差は β 線計数値の標準偏差 σ にもとずいて算出した年数で、標準偏差 (One sigma) に相当する年代です。試料の β 線計数率と自然計数率の差が 2σ 以下のときは、3σ に相当する年代を下限とする年代値（B.P.）のみを表示してあります。また試料の β 線計数値と現在の標準炭素についての計数率との差が 2σ 以下のときには、Modern と表示し、δ^{14}C‰を付記してあります。

記

Code NO.	試 料	B.P.年代（1950年よりの年数）
GaK—7957	Wood from Iwashimizu. Tr.　B.	420 ±100 A.D.1530

以上　木　越　邦　彦

出　土　遺　物

方形台状遺構とその上層にあったと推測出来る何かの遺構から出土した土器がほとんどである。

方形台状遺構の上層では、甕や椀や壺などの数種の型体の土器破片が多く出土していて、日用雑器的要素のものが多いが、台状遺構の直上では、同形、同大の壺がまとまって、特殊な状態で出土したり、石鏃などが出土している。

これらの土器型式はいずれも弥生時代末葉の前野町式土器に並行しており、静岡県二本松遺跡（沼津市歴史民俗資料館紀要２、1978「二本松遺跡の土器と方形周溝墓」瀬川裕市郎他２名）で出土した遺物に類似を見ることができ、東海地方からの影響が強いと考えられる。

ほとんどの土器の胎土には砂粒が含まれていて、表面がザラザラしており、台状遺構を構成する粘質土に似ているので、ここで製作したものと思われる。

また来年度県教育委員会が刊行する予定である「一城林遺跡」はこの岩清水遺跡とほとんど同時期で、資料の補足として好都合である。

方形台状遺構出土土器説明一覧表

第11図　説　　明

番号	器　形	形　態・製　作　技　法　の　特　徴	色　　調	出土層
1	甕 （上半部）	砂粒が表面に浮き出ている。口唇部に刻目があり、器面に若干はけ目痕あり	赤褐色、一部分黄褐色、黒色	覆土 下層
2	甕 （上半部）	大きい砂粒が多量に混入し、器面がザラザラしている。口唇部に逆三角形の刻目あり。	茶褐色、一部灰褐色、黒褐色	覆土 下層
3	壺 （完　形）	大きい砂粒が混入し、これが浮き出てザラザラしている。はけ目痕が斜方向に口縁部と胴部にあり、胴下部にわずかに稜がある。	灰褐色	遺構 直上
4	壺 （完　形）	小さい砂粒が浮き出ていて、はけ目痕が斜方向に口縁部と底に若干ある。胴下部にわずかに稜がある。	片面灰褐色、片面赤褐色	遺構 直上
5	壺 （完　形）	折り返し口縁　口縁部上方に少しはけ目痕がある。砂粒が表面に浮き出ていてザラザラしている。	黄褐色、一部赤褐色	遺構 直上
6	椀	大きい砂粒が多量に混入していて、器面がザラザラしている。底面は上げ底状。	茶褐色	覆土 下層

第12図　説　　明

番号	器　形	形　態・製　作　技　法　の　特　徴	色　　調	出土層
7	底　部	大きい砂粒が表面に浮き出てザラザラしている。底部に木葉痕あり。	灰褐色	覆土 下層
8	壺 （ほぼ完形）	表面は滑らか、口縁部の一部が欠損、胴下部に焼成後の穿孔あり。	灰褐色	遺構外 側直上

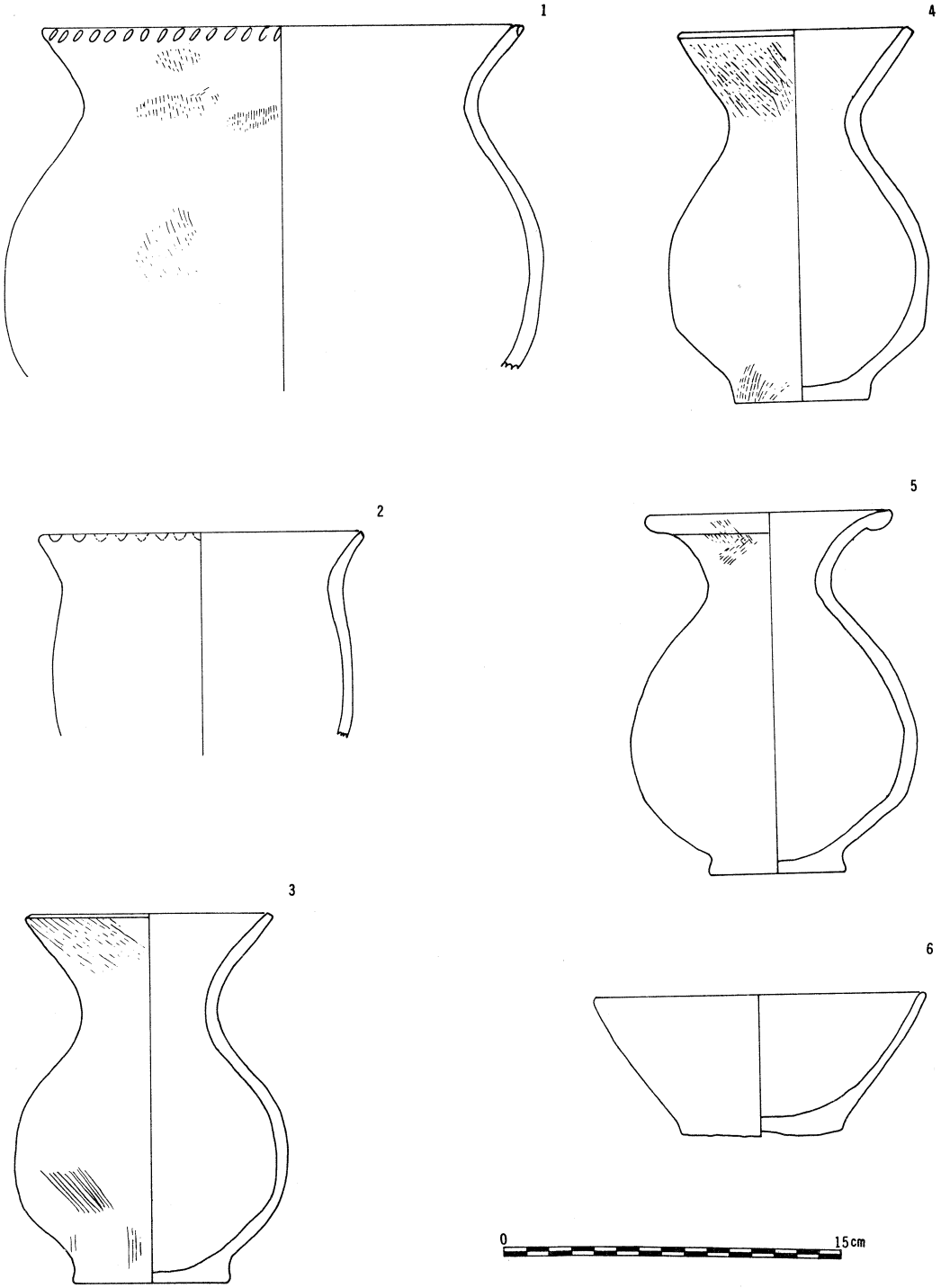
9	甕 (半分欠損)	胴上部全面と口縁部の一部に櫛目の波状文あり、頸部に横の条線あり、表面に砂粒が出ていてザラザラしている。一部に煤が付着	黒　色	覆土 下層
11	底　部	大きい砂粒が浮き出ていて、内外面ともザラザラしている。	赤褐色	覆土 下層
12	甕 (口縁部破片)	口唇部に帯状に粘土紐をはりつけている。胎土に砂粒が多く含まれている。	灰褐色	覆土 下層
13	底　部 (壺か)	大きい砂粒が表面に浮き出ていてザラザラしている。底部の上がやや内側にくびれている。	黒褐色、底面灰褐色	覆土 下層
14	底　部 (壺か)	砂粒が表面に浮き出ていてザラザラしている。少しはけ目痕がある。底部は直角に立上っている。	赤褐色	覆土 下層
15	底　部 (椀か)	薄手、立上りがゆるやかである。	褐　色	覆土 下層
16	底　部 (甕か)	砂粒が多量に浮き出ている。内面に若干、横方向のはけ目がある。	白褐色、内面は黄褐色	覆土 下層

第13図　説　　明

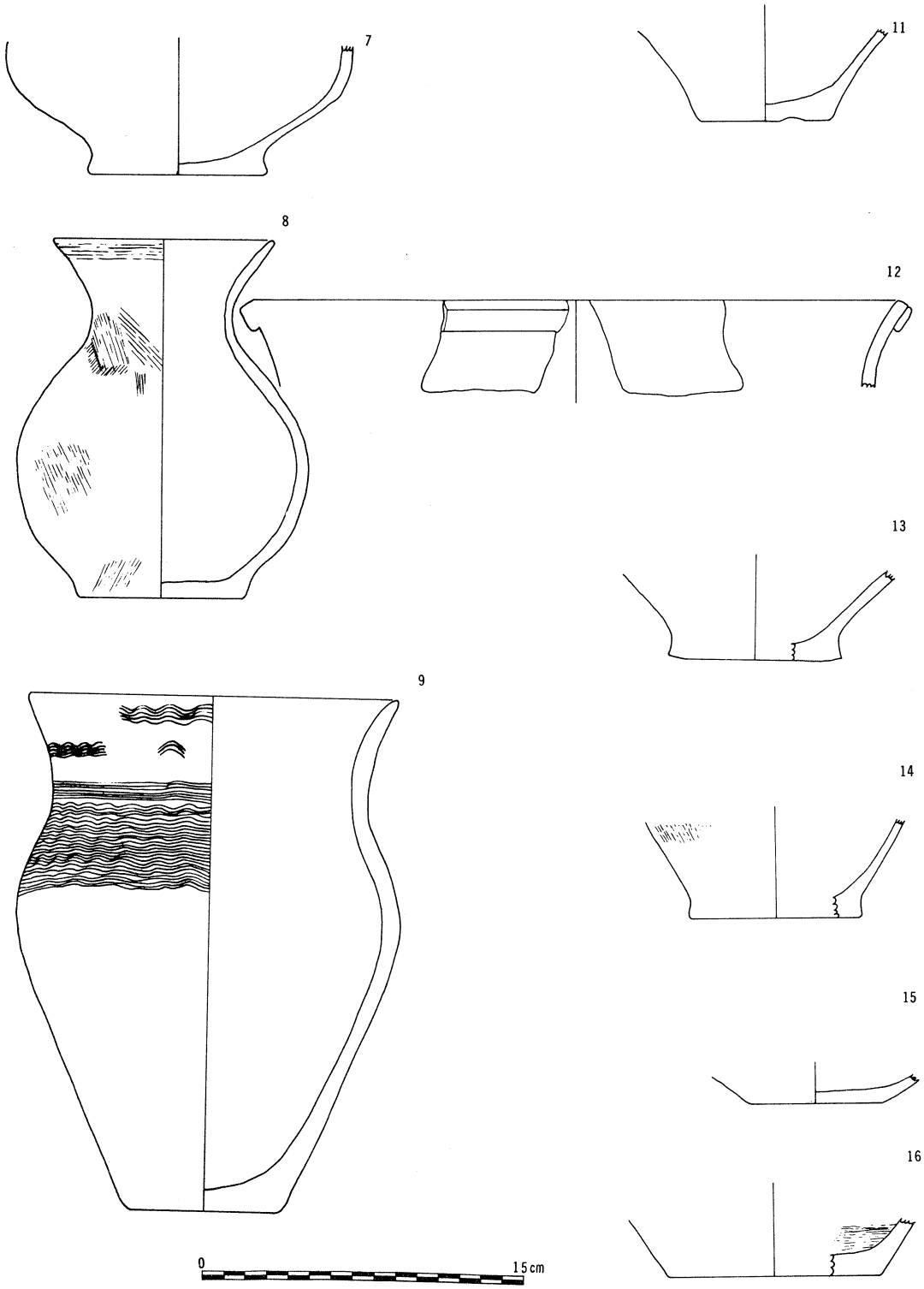
番号	器　形	形　態・製　作　技　法　の　特　徴	色　　調	出土 層位
1	底　部 破　片	砂粒が少し混入、底の立上りは直角だがすぐ外に開く。	赤褐色	覆土上層
2	甕　か (口縁部破片)	砂粒が表面に浮き出ていてざらざらしている。口唇部に刻目があり、少しはけ目痕がある。	白褐色	覆土上層
3	甕　か (口縁部破片)	砂粒が表面に浮き出ていてざらざらしている。口唇部に刻目があり、少しはけ目痕がある。	黄褐色	覆土上層
4	底　部 破　片	大きい砂粒が多量に混入している。底は丸く外に開くように立上っている。	赤褐色	覆土上層
5	壺　か (口縁部破片)	大きい砂粒が表面に浮き出ていて、ざらざらしている。樽形土器の破片か。	白褐色、内面赤褐色	覆土上層
6	底　部 破　片	少し砂粒が混入している。器面にロクロ痕がある。底面に糸切痕がある。国分式の杯と思われる。	灰褐色	覆土上層
7	口縁部 破　片	小さい砂粒が多量に表面に浮き出している。少しはけ目痕がある。薄手	外面赤褐色 内面黒褐色	覆土上層
8	壺 (口縁部破片)	砂粒が混入、折り返し口縁の上に帯状に粘土紐２本が一対で３cm～４cm間隔ではりつけてある。	白褐色	覆土上層
9	壺 (口縁部破片)	口唇部に凸帯があり、縦に２本が一対で粘土紐がはりつけてある。	灰褐色	覆土上層

追　　記

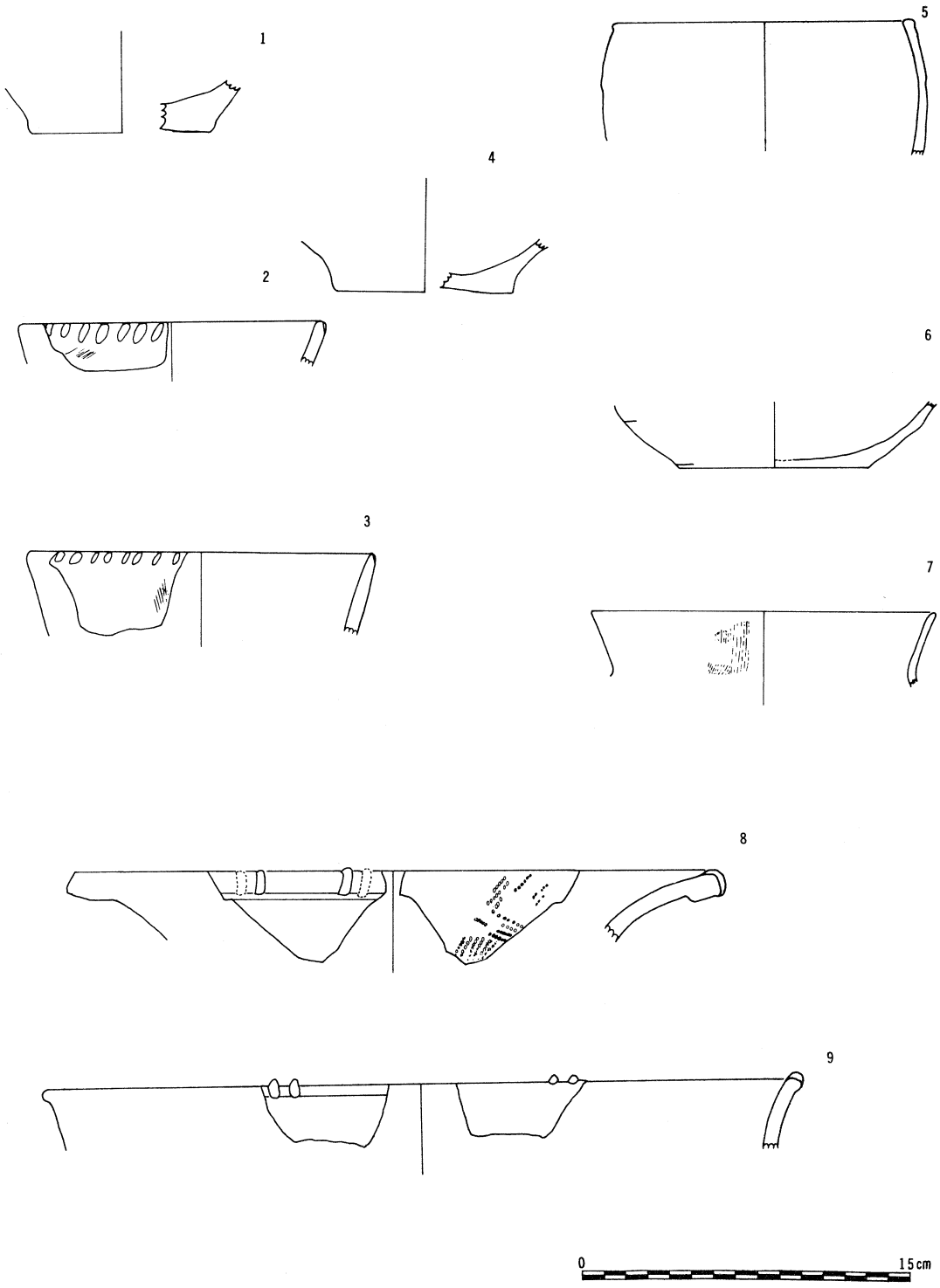
この報告書刊行直前に、岩清水遺跡の南側の台地にある東山南（上の平）遺跡の発掘で、最大一辺を30ｍをはじめとする方形周溝墓30数基と縄文時代中期の住居址等が多数発見された。ますます今後方形周溝墓が発見される可能性が出てきた。



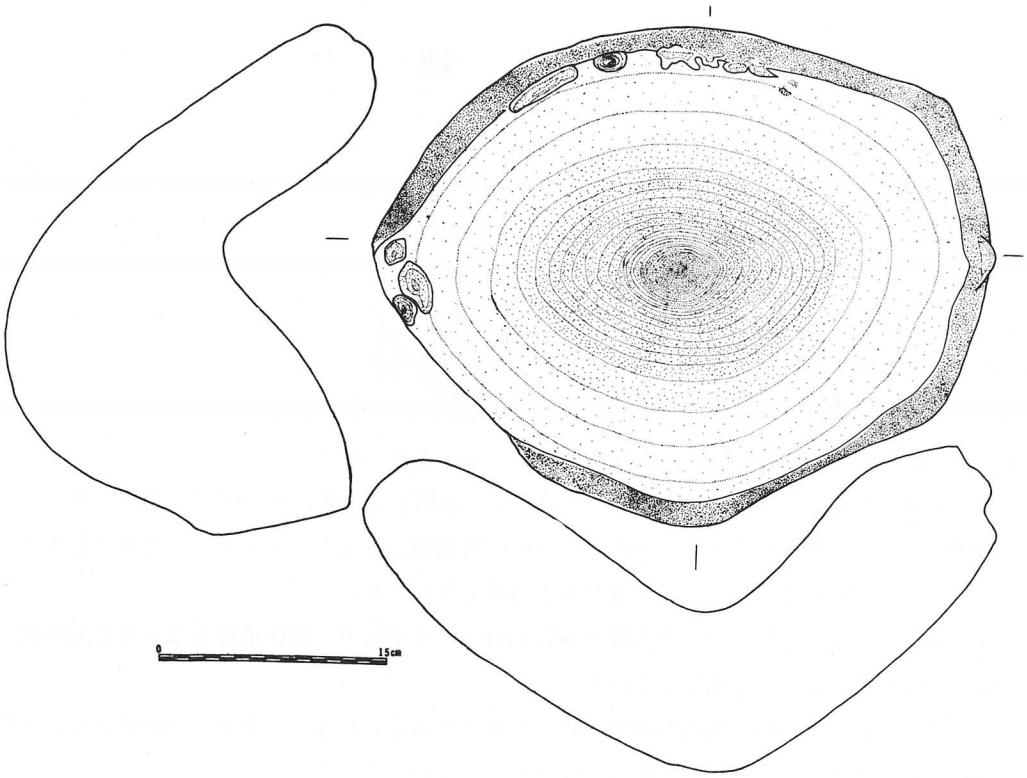
第11図　方形台状遺構出土遺物



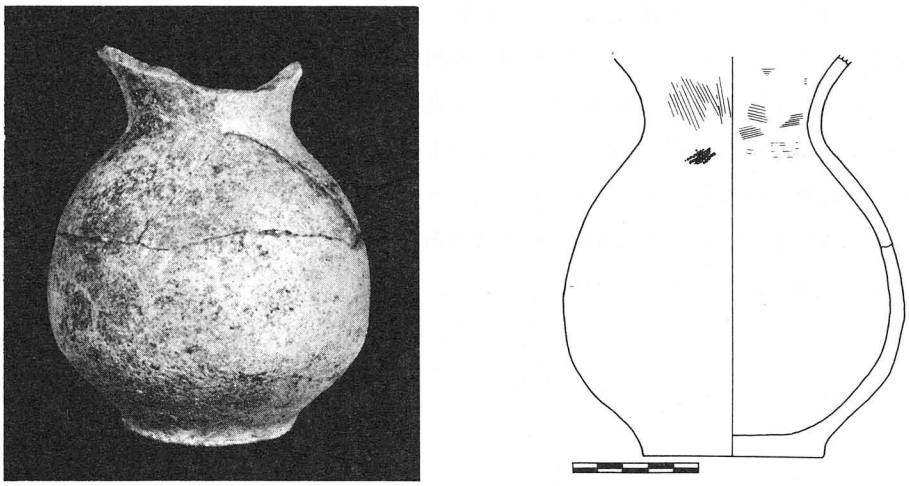
第12図　方形台状遺構出土遺物



第13図　方形台状遺構上層出土遺物



第14図　方形台状遺構付近トレンチ内出土石器



第15図　参　考　資　料（折井忠義氏所蔵）
中道町　（東山南遺跡）　発見の壺

第４節　結　び

本県の弥生時代の研究は未だ曙期といえる。過去大正時代から仁科義男氏等によって、既に耕作などによって偶然に発見されている遺物を主に対称として調査や研究発表がされてきた。本格的な調査は昨年中央自動車道建設のために敷島町地内の金尾遺跡や、東八代横断広域農道建設に伴う三珠町地内の一城林遺跡、一昨年塩山熊野線建設工事のため行なわれた塩山市地内の西広門田遺跡などの発掘が行なわれて緒についたばかりといえる。

この風土記の丘建設のために行なわれた岩清水遺跡も偶然試掘によって発見されたとは言え、風土記の丘建設や弥生時代の研究には役立つものと思われる。

この遺跡の時期は弥生時代終末の弥生町式期から前野町式期頃に並行すると思われる。

遺構については結論が出せなかったが、方形台状遺構とみることが出来て、本県でも今後注意をして、慎重に研究調査を行う必要がある遺構と思われる。

岩清水遺跡はまた来年度県教育委員会から刊行される予定の一城林遺跡とほとんど同時期で、両者でその遺物のあり方を補足している。

甲府盆地における古墳出現期の直前に比定出来ると考えられるこの方形台状遺構から、古墳出現期までの期間は未だ必ずしも明らかにされていない。

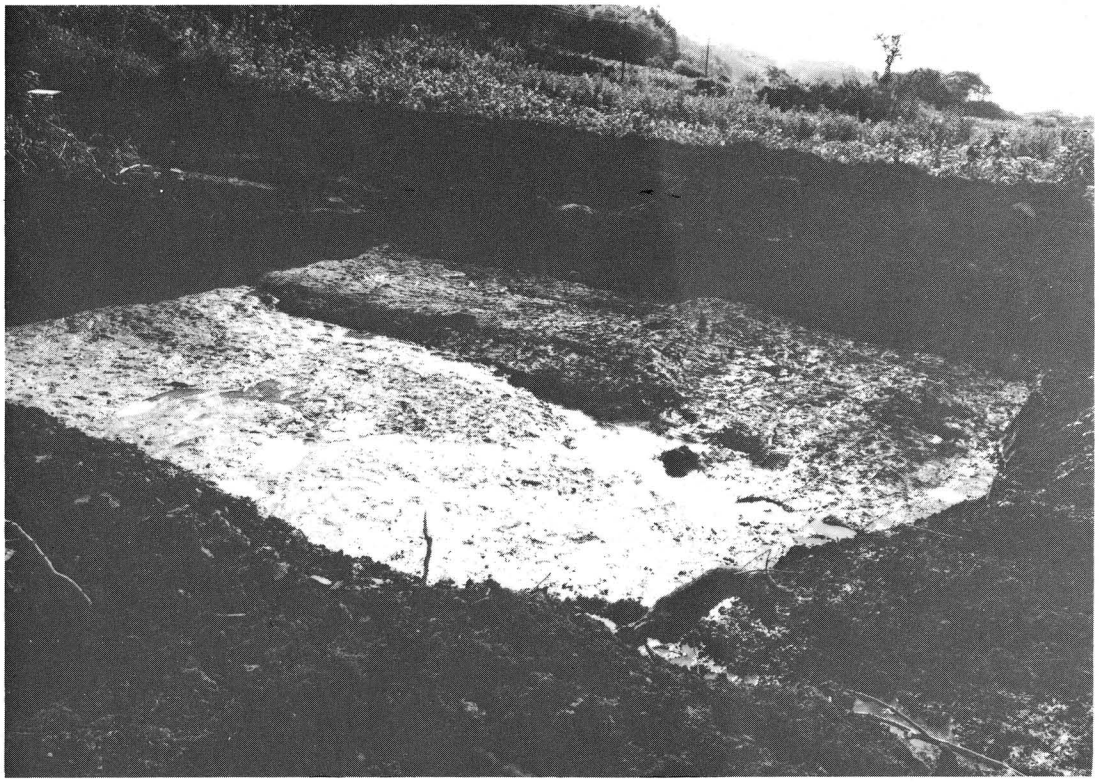
「甲斐小平沢古墳の墳形と編年的位置」（信濃30―２・昭和53年）で小林広和、里村晃一氏は、今まで最も古い時期に築造されたと考えられていた大丸山古墳（前方後円墳）の前に、米倉山にある小平沢の古墳をおいた。この古墳を両氏は前方後方墳であるものと実測によって結論づけたのである。しかし主体部や副葬品が全く知られていないので、この時期の位置づけを充分論究されていないが、その地形的位置や周囲の古墳等の状況を考慮し、更に歴史的に考えると甲府盆地で最大級の前方後円墳である、大丸山古墳や銚子塚古墳より前に、このような古墳や他の古墳（円墳も含めて）があってもよいものと考えられる。

豊富村、三珠町や中道町で既に破壊されてしまった曽根丘陵上の古墳や、曽根丘陵の北に展開する諸扇状地に散在する古式土師器散布地帯のある古墳―例えば八代町南の狐塚古墳など―について再検討する必要があろうと思われる。

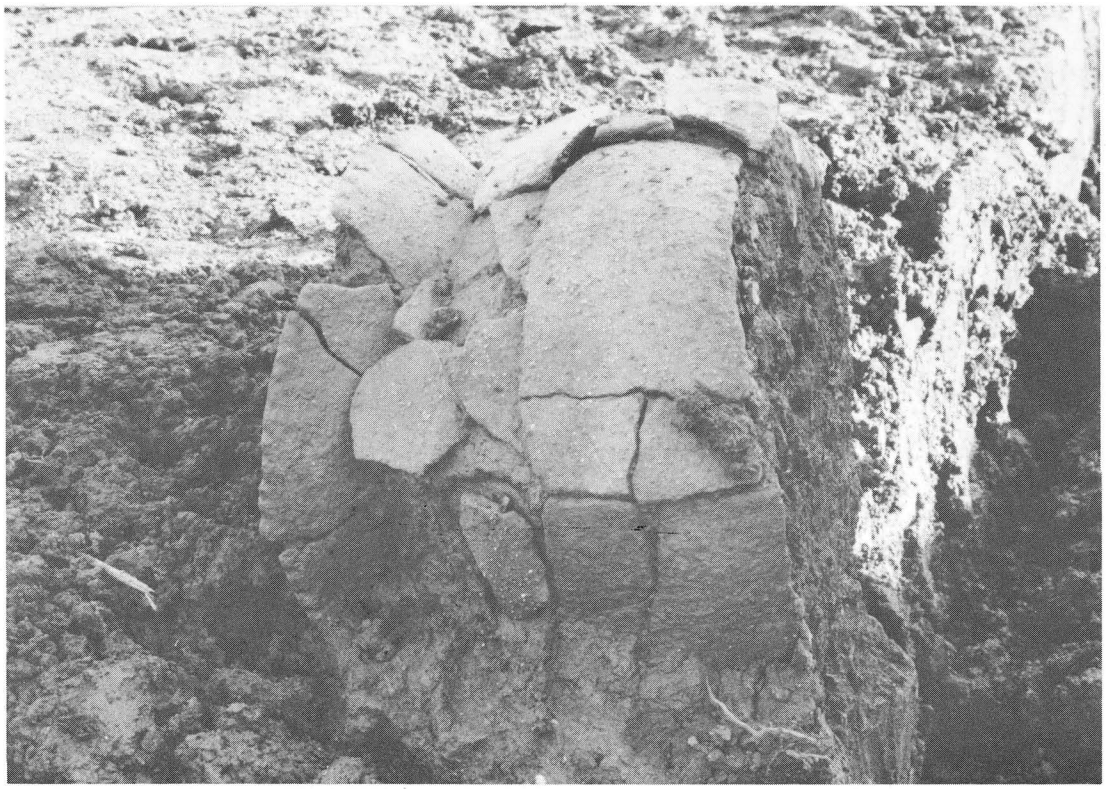
図　版

試掘地点遠影　1．大丸山古墳　2．銚子塚古墳　3．丸山古墳
4．茶塚古墳　5．杯塚古墳

図版1　試掘地点近影（東より）



方形台状遺構（Cトレンチ）



図版 2　土器（No.1）出土状況 ―方形台状遺構―

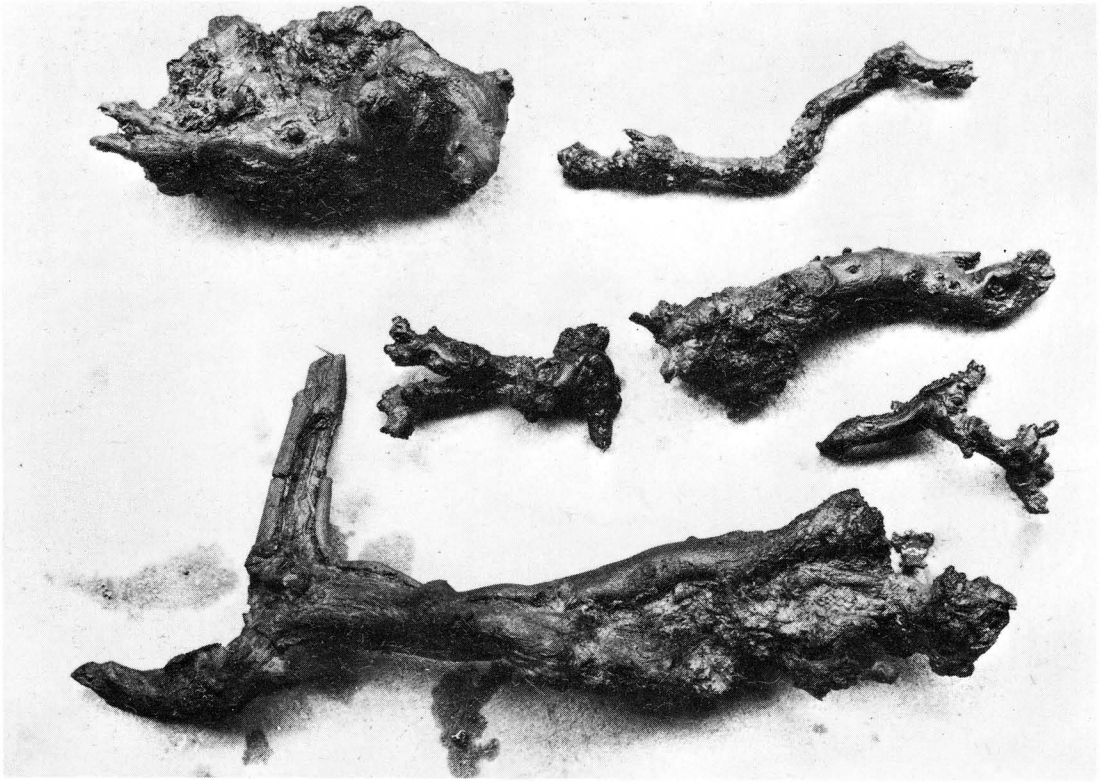
土器（No.２）出土状況　—方形台状遺構—

図版３　土器（No.３・４・５・６）出土状況 —方形台状遺構—

土器（No.８）出土状況　—方形台状遺構—

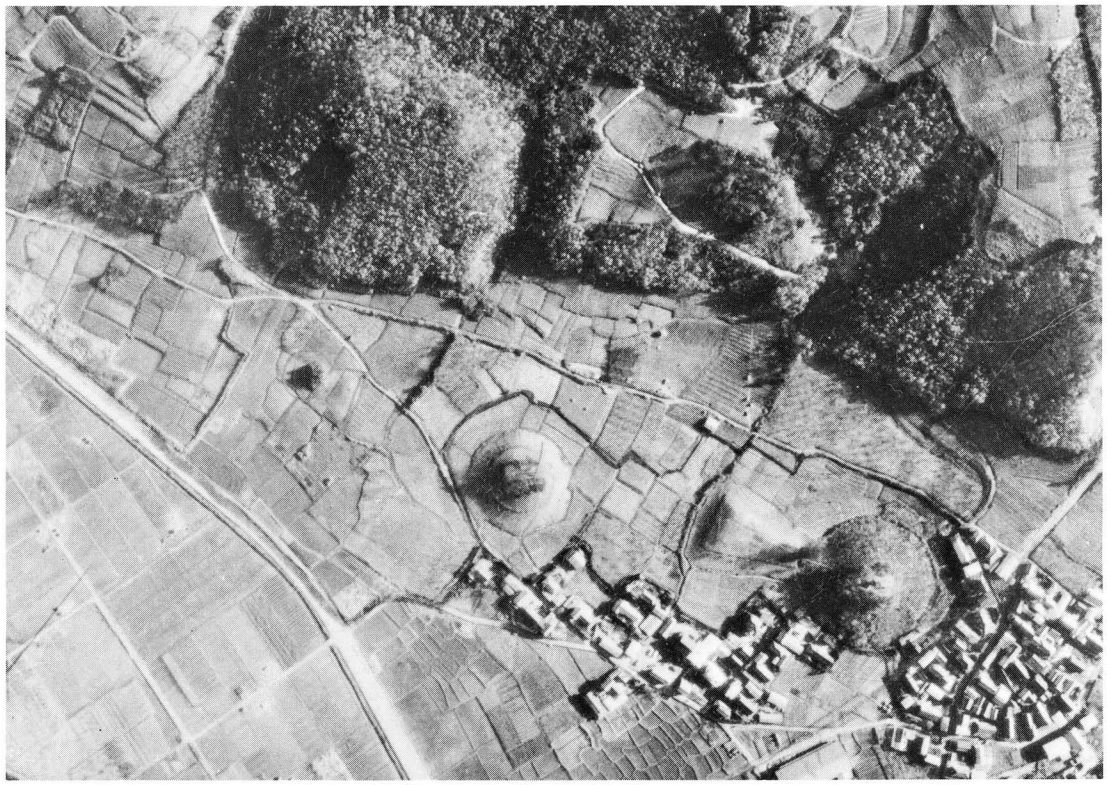
図版４　土器（No.９）出土状況 —方形台状遺構—

図版 5　暗　渠（Bトレンチ）



No.2トレンチ第2層下層（－150cm）出土の桑の株

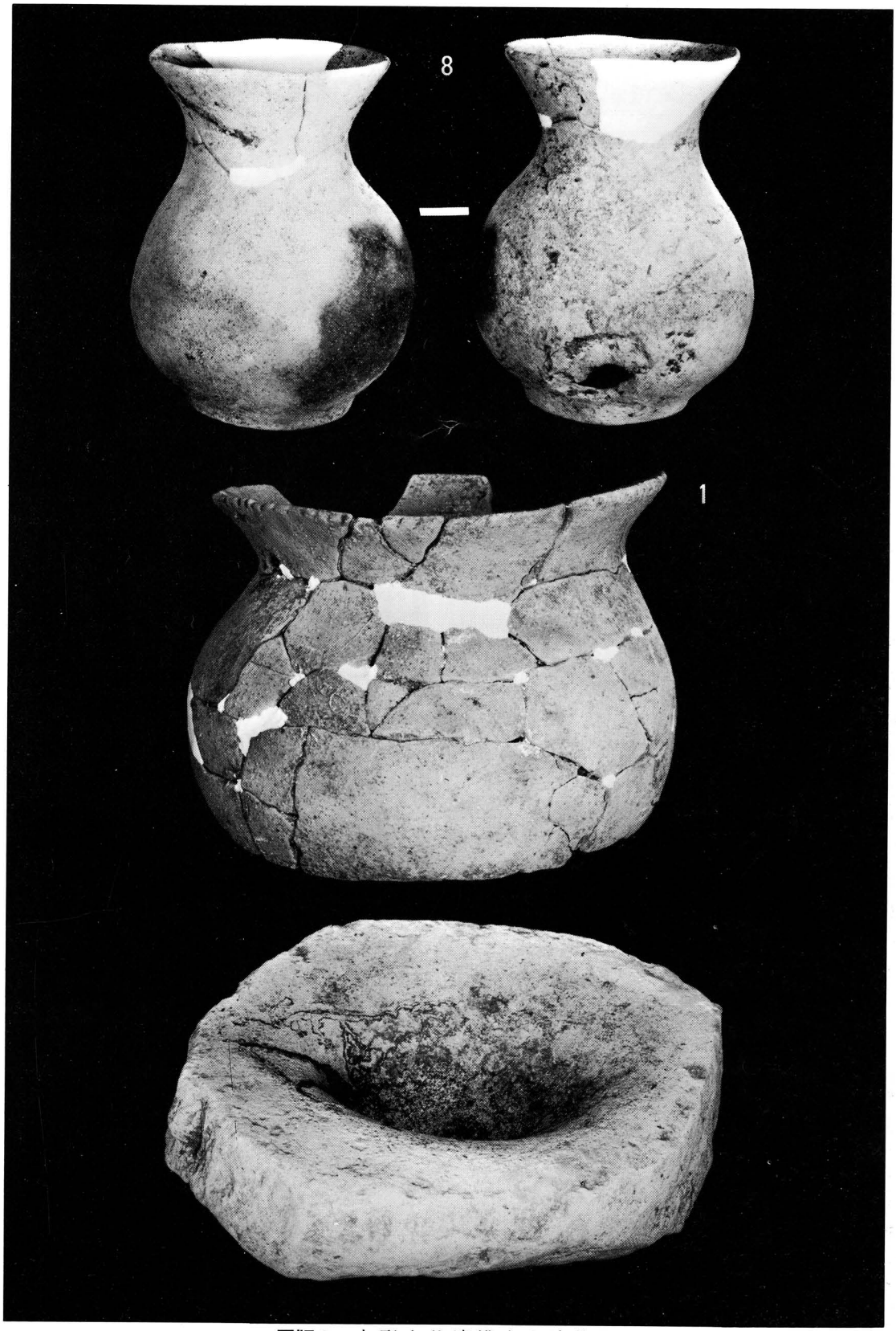
図版6　同　上　拡　大　図



発掘地点航空写真

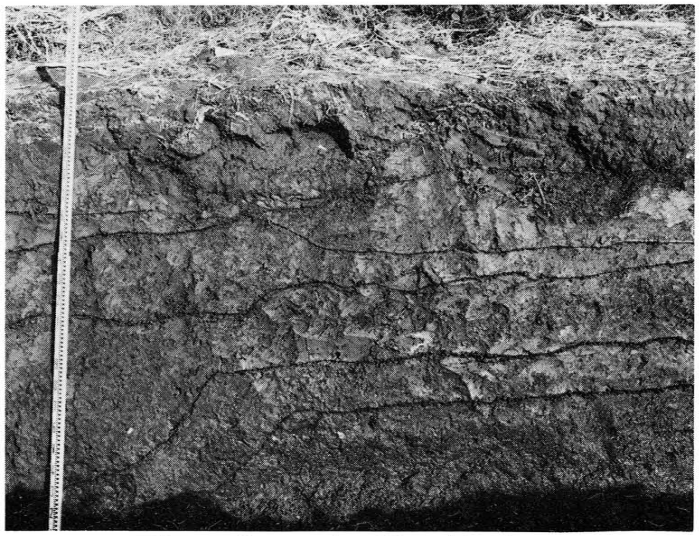
図版7　発掘参加者

図版 8　方形台状遺構出土遺物



図版 9　方形台状遺構出土遺物

図版　（Ｂトレンチ地層図（部分）



図版　Ａトレンチ地層図（部分）

図版10　Ｂトレンチ地層図（部分）

風土記の丘
岩清水遺跡試掘調査報告書
昭和54年10月1日印刷
昭和54年10月1日発行

発行　山梨県教育委員会
甲府市丸の内1—6
印刷　合資会社　ヨネヤ印刷
甲府市丸の内1—14—6